

カンボディア・ 西トップ寺院の調査

— 第3次・第4次・第5次 —

1 はじめに

西トップ寺院は中央祠堂とその両脇に2塔を配置し、東前面に仏教テラスと呼ばれる基壇をもつ寺院である。中央祠堂の建立は10世紀にさかのぼると推定されるが、その後、14世紀頃になって北塔、南塔、仏教テラスを加える改修がおこなわれたと考えられている。2000年度からはじまったカンボディアとの共同研究に基づいて、これまでアンコール・トム内にある西トップ寺院の発掘調査を5次にわたって実施してきた。

2003年度の第1次調査では仏教テラスの南側を発掘調査した(Aトレンチ)。その結果、テラスの造営の際に寺域全体におよぶ大規模な整地を施したうえに仏教テラスと寺域を区画するラテライト石列を構築したことが明らかになった。この大規模な整地は最下層より出土したクメール陶器および中国製白磁などの年代から、14～15世紀以降であることがわかった。2004年度の第2次調査では仏教テラス上を発掘し、2005年度の第3・4次調査でテラス造成盛土中に見つかった下層遺構を確認するとともに、テラス北側にもトレンチを入れた。その成果について報告する。

(杉山 洋)

2 調査成果

第2次調査 テラス南側の第1次調査では、瓦がテラス寄りに集中しており、テラス上の木造建築から崩落したものであると考えた。第2次調査では、テラス上に想定される木造建築の痕跡を確認することと、テラスの造成方法を確認することを目的に、東西3m、南北7mのBトレンチを設定した。また、テラスの東端付近で踏石と思われる平石が部分的に露出していたので、その全体を検出するため、東に拡張した。調査期間は2004年8月3日～8月10日。調査面積は28㎡。

テラス上の基本層序は上から順に、表土、瓦を多く含む灰褐色土、砂岩の小片を含む灰色土、ラテライトの小片を含む暗褐色土である。基壇外装が崩れる恐れがあったので、調査深度は地山まで及んでいない。

基壇外装の砂岩の内側には、ラテライトの石列が平行

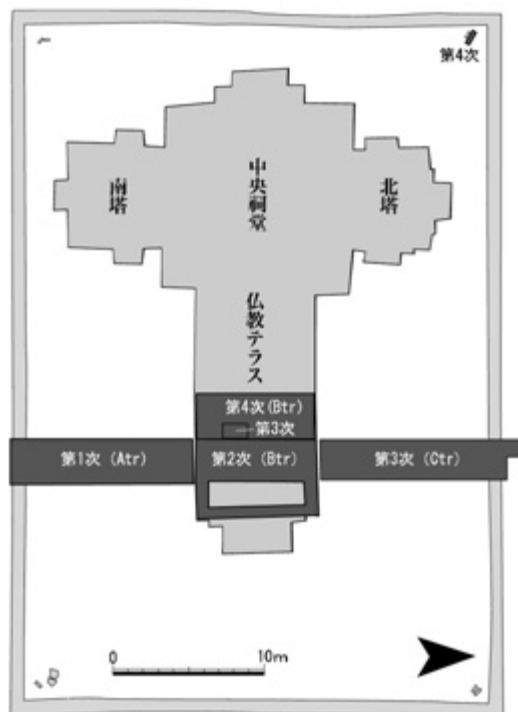


図1 西トップ寺院の調査位置図 1:500

して並べられる。現地表面から20cmほど掘り下げると、とくにラテライトの内側に多量の瓦を含む層がある。これはテラス造営時に基壇外装の裏込めに入れられたと考えられる。それを下げると灰色土に変わり、ここから高さ約30cmの石仏が1点出土した。石仏の周辺には木炭が散布しており、テラスの造営に伴う儀礼の痕跡と考えられる。また、灰色土を下げると、砂岩の南側石列から約1m内側のテラス盛土中でラテライトの石列を検出した。

また、基壇縁の砂岩の内面には3m間隔で四角い切欠きが、中央祠堂に取り付く箇所では円形の切欠きが入っており、仏教テラス上に建てられた木造建築の柱を受けた仕口であると考えられる。

第3次調査 テラス北側の様相を確認するため、1次、2次調査のトレンチの延長線上に、東西3メートル、南北12メートルの調査区(Cトレンチ)を設定した。また、第2次調査のBトレンチで確認したテラス盛土の下層で発見したラテライト列を確認するため、Bトレンチ西側に拡張トレンチを設けた。調査期間は2005年8月16日～8月25日、面積は約40㎡。

テラスの南側Aトレンチに比べ、寺院廃絶時の旧地表面上に崩落した瓦は少ない。調査区の西寄りを深く掘り下げて整地を確認したところ、トレンチ南端で地山のレ



図2 第3・4・5次調査遺構平面図・西壁断面図 1:100

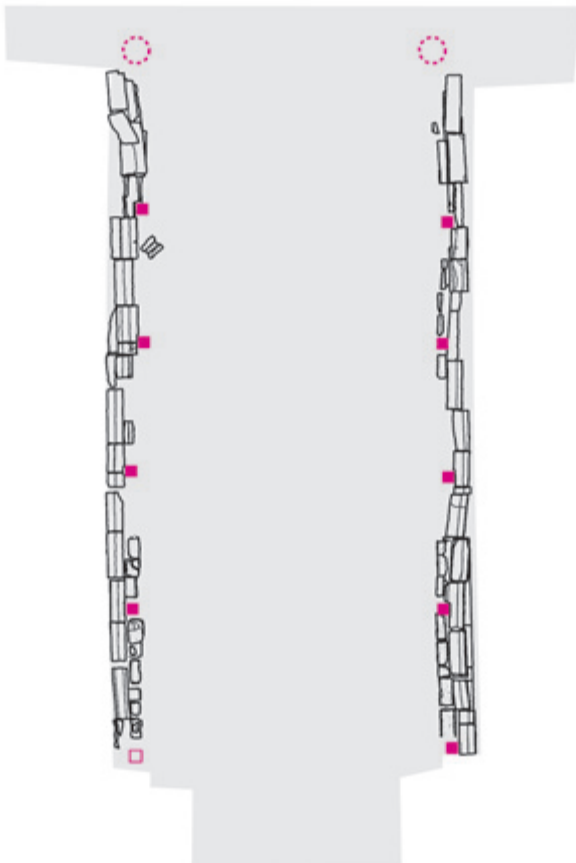


図3 木造建築の柱位置を示す仕口

ベルが南側より約20cm高いことが判明した。地山まで確認できたのは、部分的でテラスの南北2ヵ所のみであるが、南に下がる周辺の地形とも合わせて考えるならば、掘込地業というよりも、大規模に盛土して、平坦面を造成した可能性もある。また、Bトレンチの北側拡張区では、下層ラテライト列が西側に続くことを確認した。この調査では瓦、鉄釘、中国製陶磁器、クメール陶器のほか、輿に使う青銅製の金具などが出土している。

第4次調査 第3次調査のBトレンチ拡張区をさらに中央祠堂側へ広げるように、東西3m、南北7mの調査区を設定した。調査期間は2005年12月13日～12月19日、調査面積は約22㎡。暗褐色土の下層でラテライトの小片を多量に含む硬化面を検出したが、調査区全体には広がらないことを確認した。また、第2次調査においてテラス盛土中で確認したラテライト列の続きを検出した。石列には一部で配置の乱れが認められた。テラスの北側にも下層のラテライト列を検出したが、この部分はテラスの外装砂岩が崩落する恐れがあるため、十分に確認できなかった。テラスの盛土中から多量の瓦のほか、石仏の破片が2点、仏像の装飾品と思われる青銅器が2点、木造建築物に使用されたとと思われる鉄釘が少量出土した。

なお、第4次調査では寺院の北西端の結界石周辺にも調査区を設定し、結界石の据え付け掘形を確認した。結界石を動かさずに掘り下げたため、地鎮具の有無は不明である。



図4 第2次調査出土石仏

3 ま と め

4次にわたる発掘調査によって、仏教テラスは14～15世紀頃に大規模な整地を行って、その上に構築されたことが明らかとなった。第1次調査では、整地土層中に基壇外装の砂岩を加工した際の砂岩チップが集中する箇所を確認し、また、テラス盛土中から祭祀に関連すると思われる石仏および炭を検出した。これらは仏教テラスの造営時の作業工程として捉えることができる。

課題として残るのは、テラスの盛土から多量の瓦が出土したことと、下層遺構の時期であろう。瓦の存在は、木造建築の建替えを想起させるものであるが、テラス上の木造建築に葺かれていた瓦であれば、それらがテラス盛土に含まれるということは、すなわちテラス自体の建替えを意味する。周辺に存在した構造物の瓦である可能性も否定できないが、この点については出土した瓦の整理作業を進めるとともに、テラス上に想定される木造建築の構造や推定される耐用年数なども合わせて検討しなければならない。

また、下層遺構の存在は掘削深度が深く、限られた調査面積で現存のテラスを壊さない範囲の調査であるため、その時期や性格は断定できない。しかし、整地土の様相がテラスの南北で似ており、一連と考えられることから、14～15世紀以降であることは指摘できよう。すなわち、14～15世紀に大規模な整地をして仏教テラスを造り、上部構造については、その後も幾度かの建替えがなされている可能性が浮かびあがってきた。出土遺物の詳細な研究と、それに基づく各期の遺構の解釈が、今後の課題である。

(神野 恵・豊島直博)